

チームを背負う大黒柱

神尾

記録を見上げる神尾（観4）

主将・神尾が挑む、大学水泳の集大成。今季は「良い意味で機械的に自分の泳ぎを再現できるようにした」と安定感を手にし、自己ベストを大きく更新するような爆発的なタイムを目指し鍛錬を続けている。入学当初は50メートルを得意とするスプリンターだったが、苦手だった200メートルに挑戦。結果が出ない時期にも環境のせいにはせず、自らに足りないものを考え続けた。今では200メートルが一番の得意種目。新たな武器を手に、4年間の成長を大舞台で証明する。

今大会の目標は、100メートルバタフライ53秒台、200メートル同1分59秒台、思い入れのあるメドレーリレーでのB決勝進出。「自分の爆発力に懸け、1200メートルのレースで競技人生を締めくくりたい」。仲間と臨む最後の舞台。「やるっきゃないでしょ！」

最後の夏

飛び込め

水泳部
第102回
日本学生選手権
水泳競技大会
9月3日～6日
東和薬品 RACTABドーム

全国を凌駕せよ

森井

4年間で身につけたのは、目標のためならどこまでもストイックになれる力。テンポの速さを武器に、自らを追い込みながら記録を伸ばしてきた。その一方で、主務として部の運営を陰から支える。目立つ役割ではなくとも、一つ一つの仕事を確実にこなし、仲間が競技に打ち込める環境をつくってきた。

最後のインカレは100メートル平泳ぎ、200メートル平泳ぎに出場。自己ベスト更新を狙い、その先にジャパンオープン標準記録突破も見据える。「努力は夢中には勝てない」。誰よりも夢中になった水泳だからこそ、最後まで高みを追いつける。

「水泳が大好きだから」。20年間、泳ぎ続けてきた原動力は至ってシンプルだ。一般人試で立大に進学し、数ある選択肢の中から水泳部を選んだ。

大学2年時には人生で初めて全国大会の標準記録を突破。今季も自己ベストを更新し「非常に成長できたシーズンだった」と振り返る。

立大の水泳部の影の立役者。藤井無しに水泳部を語ることはできない。応援されるチームであり続けるため、日頃から部員との繋がりを大切にしている藤井。下級生の頃は目の前の仕事を覚えるのに必死で周囲にまで目を配る余裕はなかった。現在は責任者の立場となり、自身の選択が持つ影響力の大きさを実感。重圧を幾度となく乗り越えてきた。それでも、誰かのために尽力する信念だけは4年間揺るがず。厳しい練習を積み重ねた選手たちが報われる瞬間こそ、最大のやりがいだった。「弱さを補い合い、強さを誰かのために発揮できる」。それが藤井の語る立大の魅力だ。仲間と歩んだ4年間の集大成をインカレで示すことができるか。

再び、勝負の舞台へ

野井

「心の底から競技が楽しめたシーズンだった」。怪我で一時異動していたマネージャーから、一年前に選手へと復帰した野井。葛藤しながらも、周囲の支えから以前より高い向上心を持つようになったと語る。

「今までで一番楽しそうだね」。大きな転機となったのは、関東学生選手権での周囲からの言葉だった。怪我再発の怯えや過去の固執から生まれた不安。しかし、復帰を応援してくれる家族や仲間、コーチが、自身の選択が間違いないと、迷いを断ち切らせた。

インカレでの目標タイムは、個人メドレーでは200メートル2分18秒、400メートル4分52秒に設定。そして、自身が出場する個人メドレーとリレー種目すべてでB決勝進出を目指す。

「自分の可能性にワクワクしている」。パワフルなコーチに食らいついて変わるうとする仲間の姿からも刺激を受けて、自身も競技力にさらなる磨きをかける。

「私の強さを全国に証明します」。競技人生を支えてくれた人々への感謝を胸に臨む一戦。最上級生として、チームを牽引する存在になることを誓う。

立大の水泳部の影の立役者。藤井無しに水泳部を語ることはできない。応援されるチームであり続けるため、日頃から部員との繋がりを大切にしている藤井。下級生の頃は目の前の仕事を覚えるのに必死で周囲にまで目を配る余裕はなかった。現在は責任者の立場となり、自身の選択が持つ影響力の大きさを実感。重圧を幾度となく乗り越えてきた。それでも、誰かのために尽力する信念だけは4年間揺るがず。厳しい練習を積み重ねた選手たちが報われる瞬間こそ、最大のやりがいだった。「弱さを補い合い、強さを誰かのために発揮できる」。それが藤井の語る立大の魅力だ。仲間と歩んだ4年間の集大成をインカレで示すことができるか。

藤井

立教大学体育会機関紙
編集人 稲毛もあな
今泉里彩 小野里天輔
小波祐元 齋藤修華
（三九八五）二六七六
9月3日
木曜日
2026年
号外
<https://www.rikkyo-sports.com/>

アツく魅せる栗原

仲間へ誰よりも熱い声援を送る、盛り上げ隊長・栗原。悲願となるインカレの舞台で200メートル個人メドレーの自己ベスト更新と、2分8秒台の突破を目指す。

今シーズンは戦術を見直し、200メートル個人メドレーに注力した4年間の集大成に。自身の強みである筋力を活かし、後半でも粘り強く戦う泳ぎを確立した。加えて、課題であったレース前の緊張を解消するため、「無」になることを意識。努力が結実し、春の六大学戦では念願となるインカレの参加資格を手にし、会場に歓喜の渦を巻き起こした。

そして、大学で競技を続けるにつれ、「泳ぐ理由」が次第に変化。タイムの更新から、部の仲間や両親、先生などへの恩返しが一番の理由に。「幼馴染の神尾、濱田（済4）と3人で結果を残し、笑顔で抱き合いたい」。自身が水泳を続ける理由でもある二人と最高の形で大学水泳を締めくくりたいと語る。

「大丈夫だ。俺に任せとけ。全部うまくいく」。仲間からの大きな声援を受け、熱い漢が挑む最後のインカレが幕を開ける。